

【表紙】

作品タイトル  
「彼方からの手紙」

(かなたからのてがみ)

がまはち 作

原稿枚数 188枚 (本文のみ)

《kamada@k.i.l.co.jp》

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

「彼方からの手紙」

脚本 .. がまはち

登場人物

海野奈美（うみのなみ、24）

山口宏志（やまぐちひろし、25）

筑波博（つくばひろし、72, 32, 17）

大穂穰（おおほのみゝる、72, 32）

ソノミ（ソノミ）等身大人型（女性型）ロボット

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

ミ	ミ	南	利	大	三	筑	筑	筑
ツ	ツ	条	根	曾	沢	波	波	波
シ	シ	み	川	根	正	未	美	健
ョ	ョ	ど	翼	登	行	来	由	太
ン	ン	り	(	志	(	(	紀	朗
ス	ス	(	と	男	み	つ	(	(
タ	タ	な	ね	(	さ	く	つ	つ
ツ	ツ	ん	が	お	わ	ば	く	く
フ	フ	じ	わ	お			ば	ば
2	1	よ		そ	ま	み		
(	(	う	つ	ね	さ	く	み	け
通	進	み	ば	と	さ	、	ゆ	ん
信	行	ど	さ	し	ゆ	10)	き	た
担	担	り	、	お	き		、	ろ
当	当	、	27)	お	、		37)	う
)	)			、	45)			、
								39)

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

海野 (N) 「後で聞いた話によると、この時、日本中、いや世界中のヒロシの元に、この時、

○ パソコン画面

める家族。

い。それを心配そうに部屋の中から見つ

りと外を眺めている。その目に気はな

縁側で座り込み、筑波博 (72) がぼんや

郊外の日本家屋。静かに雨が降っている。

○ 筑波博宅・縁側 (昼)

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

海野 (N) 「この一通のメールから、あんな結  
末を迎えるとは、この時あたしは思いもし  
ませんでした」

\* \* \*  
「ここですか？」

「ヒロシさん、ソノミです。あなたはどう  
りと次の文字が描かれる。あな  
単色で、少しドットが荒い文字でゆっ  
少し古びたパソコンの画面。黒地に緑の  
同じ文面のメールが届いたそうです」

タイトル『彼方からの手紙』ーシナリオ

海  
野

(N)「そしてアタシのヒロシの所にも：  
捨てられる。アタシのヒロシの所にも：  
先ほどの文面がちらっと見えるが、すぐ  
別の携帯の画面。メールが届き、開くと  
\* \* \*  
削除される。メールが届くが、そのまま  
\* \* \*  
くが、自動的に破棄される。  
別のパソコンの今風の画面。メールが届

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

テロップ「2058年6月15日、東京郊外」  
○ パート室内（昼）  
○ タイトル  
：  
「  
晶 デイスクレイがあり、足下にデスクトップ  
ワ ン ル ー ム の ア パ ー ト 。 壁 際 の 机 に は 液  
ッ プ パ ソ コ ン が あ る 。 少 し 離 れ た 壁 掛 け  
テ レ ビ で は 、 サ ッ カ ー の 試 合 を し て い る 。

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

海野 間とサッカー出来るようになるなんて。今  
山口宏志（22）。サッカーの試合は、一  
方のチームはロボットであった。少し離  
れた台所では、海野奈美（24）が、コー  
ヒーをいれている。  
海野 「ねえ、そろそろ、試合、始まっちゃっ  
た？」  
山口 「たった今、始まったところ」  
海野 「でも、凄いやね。ロボットがついに人

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

海 山 海 山  
野 は 口 方 う 野 ど 口 回  
「 ー ー ー ー の ー 、 ー ー ー ー で  
こ ー い あ ん ー ー へ 今 3 回 ー ー  
う ん ー ま ん ー や ー へ え 回 は 目 。 最 ー  
い だ ま り な ら ー 、 は 期 待 出 来 初 は ー  
う け り な ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
の ー ね ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
や ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
っ ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
て る ん ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
ん ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
じ ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
ゃ ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
な ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
か ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
っ ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
た ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

	海	山	海	山
	野	果	野	口
の	「	だ	「	「
中	マ	な	人	僕
に	グ	、	工	は
入	カ	、	自	ど
っ	ッ	こ	我	ち
て	プ	れ	ね	ら
行	を	は	え	か
く	2	。早	。あ	と
海	つ、	く	た	言
野	両	来	し	え
。そ	手	い	は	ば、
の	に	よ	も	頭
時	持	「	っ	方
、壁	っ		ぱ	面
際	て、		ら	。人
の	部		こ	工
	屋		っ	

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

海 山 海 山 海  
野 ん 海 口 か 野 う 口 野 パ  
ー だ 外 ー 使 ー ー ソ  
ま だ の ー っ し ー あ コ  
あ ー 研 ー い っ っ ー ん ー ン  
、 究 者 だ ん っ か な の 何 か  
い 者 仲 ろ だ し 、 今 来 ー ー  
い 間 と 携 っ っ っ っ っ っ っ  
ん 連 帯 だ っ っ っ っ っ っ っ  
だ 絡 を 使 っ っ っ っ っ っ っ  
け 取 の 便 利 な  
ど ね ー

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

山 海  
口 野  
「お  
い、  
い  
くら  
なん  
でも  
勝手  
に」  
海  
野  
「両  
手の  
マグ  
カップ  
を机  
に置  
いて  
は  
関  
係  
な  
い  
よ」  
山  
口  
「ど  
う  
せ  
ス  
パ  
ム  
メ  
ー  
ル  
か  
な  
に  
か  
だ  
ろ  
。僕  
海  
野  
「何  
か、  
メ  
ー  
ル  
来  
て  
る  
み  
た  
い  
な  
ん  
だ  
け  
ど」  
山  
口  
「え  
、誰  
？  
そ  
の  
み  
？  
知  
ら  
な  
い  
よ」  
海  
野  
「あ  
れ  
？  
宏  
志  
君  
？  
（少  
し  
苛  
立  
つ  
て）  
そ  
の  
パ  
ソ  
コ  
ン  
画  
面  
を  
ち  
ら  
つ  
と  
見  
て

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

海野「怪しいな。あたしという女がいながら、  
誰にちよっかい出してるの？調べてやる」

山口「そのみっ、知らないって」

海野「そのみっ、誰なの？」

山口「知るかよ」

どこですか？なにこれ？」

わね。ひろさん、そのみです。あなたはい

海野「へー、今時、文字だけなんて、珍しい

慌てて机に向かう

メールの文面を開いて



タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

海野 「（調子に乗って）えーっと、ここを通つて、あそこを通つて、∴∴え、月？」

山口 「え？月？」

海野 「そう、月。月のサーバーを最初に通つてる。月なんて、あんた、知り合っているの？」

山口 「だから、知らないって」

海野 「でも、月なんて、普通の人は、そうさう行けないでしょ」

山口 「そうだな。確か、月面基地はあったはずだけど、ごく一部の国関係とか、大企業



タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

海野 「はい、送信っ」と

と借りるね」

海野 「（ここにこして）うん、じゃあ、ちよつ

山口 「：：好きにしろ」

んなメールを出したのか」

やないの。誰が、どこから何のため、こ

海野 「面白いじゃない。突き止めてやろうじ

ろくな事がないんだから」

うんだ？お前がそう言う顔をする時には、

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

る。そこには海野がトレイを持って近づいてくる。

は空いている。山口がお昼を食べている。

午後の大学の学食。お昼時は過ぎて、席

テロップ「2058年6月20日、東京」

○大学の学食（昼）

海野「返事を書いたの。ちよっとお土産をつ

山口「何をしたんだ？」

けてね（にこつと笑う）」

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

山	海		山	海	山	海	海
口	野		口	野	口	野	野
「	「	海	「	「	「	「	「
メ	あ	野	ほ	少	い	何	山
「	の	、	い	し	い	食	口
ル	メ	向	「	は	じ	べ	、
？	「	か	と	野	ゃ	て	無
あ	ル	い	け	菜	な	ん	言
、	の	の	「	と	い	の	で
あ	件	席		か	か	？	う
れ	、	に		も	°	ま	な
だ	覚	つ		食	好	た	づ
ら	え	い		べ	き	カ	く
「	て	て		な	な	レ	
	る			い	ん	「	
	よ			と	だ	？	
	ね			、	か	「	
	「			健	ら		
				康	「		
				に			



タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

海野 「ちよつとこれ、見てよ」

携帯端末を取り出して、山口の前に置く。

操作をする、携帯端末に、立体映像が

映る。

○

携帯端末映像（室内）

月面基地の室内からの映像。地上とそれ

ほど変わらない室内。背景には調査機材

が映り込んでいる。三沢正行（30）が映

っている。

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

三 沢 「やあ、奈美ちゃん、久しぶり。奈美ちゃんからのお願いの件なんだけど、奈美ちゃんの言った通りだ

三 沢 「映像、早回しで進む

本 当 。 ここじゃなくて」

海 野 (オハハ) 「(慌てて) た、ただの先輩だよ、と親しげなんだけど？」

山 口 (オハハ) 「ねえ、この人、誰？随分とお前

たよ。嬉しいなあ」

三 沢 「やあ、奈美ちゃん、久しぶり。奈美ちゃんからのお願いの件なんだけど、奈美ちゃんの言った通りだ

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

山  
口  
(  
オ  
チ  
チ  
)  
「  
無  
人  
な  
の  
に  
？  
」  
た  
よ  
「  
の  
メ  
ー  
ル  
の  
出  
所  
は  
、  
そ  
の  
I  
S  
S  
博  
物  
館  
だ  
っ  
今  
、  
俺  
、  
そ  
の  
仕  
事  
を  
し  
て  
る  
ん  
だ  
。  
で  
ね  
。  
例  
惑  
星  
軌  
道  
に  
移  
設  
す  
る  
事  
に  
な  
っ  
て  
。  
ち  
よ  
う  
ど  
軌  
道  
に  
捨  
て  
よ  
う  
と  
、  
お  
っ  
と  
、  
口  
が  
滑  
っ  
た  
。  
エ  
レ  
ベ  
ー  
タ  
建  
設  
で  
邪  
魔  
に  
な  
っ  
た  
ん  
で  
、  
惑  
星  
館  
に  
な  
っ  
て  
い  
た  
所  
。  
今  
は  
無  
人  
で  
、  
今  
度  
、  
月  
テ  
ー  
シ  
ョ  
ン  
に  
し  
て  
少  
し  
前  
ま  
で  
月  
軌  
道  
で  
博  
物  
つ  
た  
よ  
。  
I  
S  
S  
博  
物  
館  
、  
最  
初  
の  
本  
格  
宇  
宙  
ス

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

三 海 山 三  
沢 野 口 沢  
「 廃 口 無  
棄 棄 口 人  
さ され 驚 何 が あ っ た ン だ ？ 」  
れ た 無 数 の 人 型 ロ ボ ッ ト 。 ど う  
も 、 無 人 で 、 し か も 、 今 度 捨 て ら れ る か ら  
準 備 の た め に 、 リ モ ー ト コ ン ト ロ ー ル を 試  
み て る ン だ け ど 、 ど う も 調 子 が 悪 く て 。 で 、  
昨 日 、 ち ょ っ と 現 場 ま で 出 か け て 、 見 て き  
た ン だ 。 そ し た ら 、 何 が あ っ た と 思 う ？  
ん て 、 不 思 議 だ よ ね 。 で 、 例 の 移 設 作 業 で  
三 沢 「 無 人 の 施 設 か ら メ ー ル が 発 信 さ れ る な

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

三 山  
沢 「それ、真っ暗な室内でボーツと光つ  
てて、まだ生きてるみたいなんだ。中には、  
腕とか、足とか、取れたり壊れたりしてる  
のもあるから、不気味だよ」  
山口 (オチ) 「廃棄されたロボツト？」  
よつとしたら千いつてるかも」  
見て、数百体つてオーダーだよ、あれ。ひ  
から、もう、あちこちにぎつしり。ざつと  
いなんだな。気密区画から、そうでない所  
つていうことで、誰かが不法投棄したみた

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

海野（オホノ）「アーミーの方じゃないよ。サン

山口（オホノ）「生きてる？」

三沢「で、どうやらメールはそのロボット、

いや、特定の、とか言うんじゃない、その

の、どうもLANでつながってネットワー

クを組んでいる、ロボット群とでもいう

のかな、そこかららしいんだ。ISSのり

モーターコントロールを奪ってるのも、そ

つが原因らしい」

山口（オホノ）「ロボット、群体？」

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

海野 ー 海野、携帯端末を操作して映像を止める

○ 大学の学食（昼）

こっちだと、なかなか調べにくいんでねー

ちよっとそっちなでも調べてもらえないかな。

て。で、奈美ちゃんにも情報を送るから、

なんとかしたいんだけど、よく分からなく

三沢 ー とにかく、こっちでも困ってるんで、

ゴとかの方、むれてるやつー





タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

とどて能が山口テ○  
っ、はのあーロ大学  
ては僕あ歴ああッ大  
はみあ史あのの学  
押みあ史を思とあの構  
さみあ史を思とあの内  
えみあ史を思とあのを  
てみあ史を思とあの、  
おみあ史を思とあの山  
かみあ史を思とあの口  
なみあ史を思とあのと  
けみあ史を思とあの海  
ればみあ史を思とあの野  
ならみあ史を思とあのが  
ないみあ史を思とあの歩  
、みあ史を思とあのいて  
、みあ史を思とあのいる

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

海 山 海 山 海  
野 の 口 野 大 た 口 野 歴  
「 制 「 「 で ん 「 「 史  
そ 御 そ こ ま だ よ 。 調 へ だ  
ん 術 、 か ら 教 大 べ ー っ  
な 偉 で 大 穂 会 大 学 歴 っ  
い 先 伝 穂 会 大 学 史 た  
生 生 説 教 授 授 授 退 関 史 だ  
が 、 の 授 授 授 官 係 者 ね  
の 一 授 授 授 行 者 が ね  
？ 介 授 授 授 行 者 が ね  
」 の 授 授 授 行 者 が ね  
院 授 授 授 行 者 が ね  
生 授 授 授 行 者 が ね  
に ほ 授 授 授 行 者 が ね  
い い 授 授 授 行 者 が ね



タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

大 海 大 山 大 海  
穂 野 か 穂 何 I 口 出 穂 野  
「 「 から 「 か S 「 し 「 「  
： ： 考 ま あ S 先 て ： ：  
： ： え あ 係 博 生 て ： ：  
そ ど て 、 確 が 物 が 開 あ 、 教  
う う 、 証 ある 館 に 発 ね 「 授  
だ い 恐 ら が ん に 大 絡 まん  
な う こ く あ る で 量 に す  
： こ と そ る す か 廃 ん  
： 。 で う 訳 で か 棄 いた ま  
少 す か う け は ない が 、 ち  
し か ？ こ と だ ろ う 「 状 況 ち  
昔 「 と だ ろ う 「 状 況 ち  
話 だ ろ う 「 状 況 ち  
に つ き 「 状 況 ち  
き 「 状 況 ち

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

合　　っ　　て　　く　　れ　　な　　い　　か　　な　　」

○　　研　　究　　室　　（　　昼　　・　　回　　想　　）

テ　　ロ　　ッ　　プ　　「　　2　　0　　1　　8　　年　　6　　月　　3　　0　　日　　、　　東　　京　　郊　　外　　」

大　　穂　　穰　　（　　32）　　が　　、　　筑　　波　　博　　（　　32）　　と　　共　　に　　、

研　　究　　室　　で　　人　　型　　ロ　　ボ　　ッ　　ト　　を　　組　　み　　立　　て　　て　　い　　る

大　　穂　　（　　オ　　ハ　　）　　「　　俺　　は　　昔　　、　　親　　友　　と　　一　　緒　　に　　研　　究　　を　　し

て　　い　　た　　。　　例　　の　　ロ　　ボ　　ッ　　ト　　の　　原　　型　　と　　な　　っ　　た　　、　　人

型　　ロ　　ボ　　ッ　　ト　　を　　開　　発　　し　　て　　い　　た　　」

山　　口　　（　　オ　　ハ　　）　　「　　ロ　　ボ　　ッ　　ト　　の　　原　　型　　？　　」

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

大穂 (オハハ) 「親友は……、博は、焦っていた」

海野 (オハハ) 「ひろし？ ひろしって言ったんで

すか？」

大穂 (オハハ) 「そう、博、筑波博。あいつは功

を焦って、事故を起こしてしまった」

山口 (オハハ) 「事故？」

大穂 (オハハ) 「そう、事故」

○ 研究室内 (昼・回想から戻る)

大穂 「博は事故で昏睡状態になった。外傷は

体した事はなかったんだが、起きなかった  
んだー  
山口「何が、あったんですか？」  
大穂「大した事ではない。いや、そうではな  
いか。ロボットが、調整不足で暴走事故を  
起こしたんだ。初期のロボットだから、力  
が強く、とても人力では対処出来なかった。  
俺がパワードスーツをとり向かった隙に、  
あいつは、彼女を庇ってロボットの攻撃を  
受けたー

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

大 海  
穂 野  
「 誰  
を そ  
研 究  
し て  
い た  
ん だ  
。 誰  
か が  
外 部  
か ら

か は  
っ 強  
た い  
「 か  
ら  
、 暴  
れ る  
だ け  
で シ  
ヤ  
レ に  
な ら  
な

は い  
か な  
か っ  
た だ  
け っ  
ろ う  
な  
。 で  
も  
、 力

し て  
、 意  
図 的  
に 攻  
撃  
を し  
よう  
と し  
た 訳  
で は

大 海  
穂 野  
「 ま  
あ  
、 仮  
に ロ  
ボ  
ット  
の  
攻  
撃  
？  
」

「 ロ  
ボ  
ット  
の  
攻  
撃  
？  
」

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

れ	ん	大	海	大	で	試	山	す	操
で	だ	穂	野	穂	す	合	口	る	縦
、	が	「	「	「	か	、	「	と	す
彼	、	そ	で	そ	？	ロ	先	い	る
女	眠	う	、	う	「	ボ	日	う	ん
が	っ	だ	昏	だ		カ	の	よ	で
、	た	っ	睡	な		ッ	、	う	は
園	ま	た	し	、		プ	人	な	な
美	ま	。外	た	そ		の	と	「	く
君	ま	傷	ん	の		ロ	ロ		て
が	起	は	で	先		ボ	ボ		、
あ	き	ほ	す	駆		ッ	ト		自
れ	な	と	よ	け		ト	と		分
を	か	ん	ね	な		み	の		で
や	っ	ど	「	ん		た	サ		自
っ	た	な		だ		い	ッ		分
た	ん	か		ろ		な	カ		を
ん	だ	っ		う		感	「		操
だ	。そ	た		な		じ	の		縦
「				「					

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

海野「そのみ？」

山口「何をやっただんですか？」

大穂「うん。博は、最近のロボットとは違い、人工の神経細胞、ニューラルネットを使っ

た人工脳の研究をしていて、それをロボッ

トに使ったんだ」

海野「ニューラルネット、人工脳のロボット？」

大穂「そうだ。そしてそれを制御するため、

博はあれを、SONOMIを作った」

海野「え？そのみを作った？」

大穂、立ち上がって、側の白板に、次の  
文字列を書く

「SONOMI: Self-Organized Neuro  
Optimizing Mental Interface」

書き終わると席に戻って、

大穂「SONOMI、やつが作ったコントロ  
ールデバイスの名前だ。あいつの当時の恋  
人、園美君の名前からとったそうだ。簡単  
に言えば、人の脳と人工脳の間の仲立ちを  
して、ロボットを直接コントロールするた



タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

大 山  
穂 口 な と 人 え 士 脳  
「 」「 な も 対 て の と  
今 無 っ も 、 人 、 の 仲  
考 茶 た ぶ 使 S O N O M I デ バ イ ス を 調 整 し て 、  
え し ま す ね 「 つ け 本 番 で 、 う ま く 行 く 保 証 は  
考 え る と 、 そ う だ な 。 で も 、 当 時 は  
そ う し か な か っ た 。 ど ん どん 衰 弱 し て  
行 く あ い つ を 見 て い る と 、 何 だ も 良 い か ら

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

大穂 「大穂に）すいません。続けてください」  
と話が長くなつた。今回との関係だが、ど  
山 口 「（小声で）奈美、そんなに先走るなよ。  
な がるんですけど、それと今回の件は、どうつ  
海 野 「何か、キーワードは出尽くした感じが  
救 出に向かったんだ」  
あ い つ の、博の夢に飛び込んで、あいつを  
つ て 思 っ た ん だ ろ う。そうして園美君は、







タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

海野 「実際、何か起こってる訳だから、考えられるなら、考えるしかないでしょ」

山口 「千体のロボット群体が新しい何かを生み出した……」

大穂 「え、今、何と言った？千体のロボット？」

海野 「はい、正確な数は不明ですが、千体くらい居そうだと……」

大穂 「……そうか、一体当たり一千万ニューロンのロボットが千体で群体を形成して、百億ニューロンか。人のニューロンは百四



タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

大穂「多分、そうなんだろう。いや、  
ないが、そうとしか考えられない。勝手に  
意味のあるメールを発信するなど」  
海野「人工自我が完成していったって、そんな  
事、：：信じられない」  
山口「おいおい、さっきと話が違うぜ」  
海野「だって人工的に作ってそれらしく見せ  
ラムで人が人工的に作ってそれらしく見せ  
ているんじゃないんでしょ。自分で考えて、自分  
の意志があるんじゃないでしょ。それじゃ、人と同

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

山 海 山 海 大  
口 野 口 よ て 野 穂 じ  
「 も 「 「 ね て 「 なる 穂 「 じ  
同 の 「 そ 「 捨 今 「 ち ん 「 穂 「 じ  
じ 「 そ ん 捨 度 「 よ ん だ 「 穂 「 じ  
事 「 な の ん てる 、「 っ だ ろ 「 穂 「 じ  
？ 「 の ん じ 惑 待 と う 話 穂 「 じ  
「 「 ど じゃ 星 っ な 「 信 穂 「 じ  
「 「 っ なく 軌 っ 「 じ れ 穂 「 じ  
「 「 ち くて 道 に っ 「 信 穂 「 じ  
「 「 ても 、「 捨 っ 「 じ れ 穂 「 じ  
「 「 い 移 、「 の I 穂 「 じ  
「 「 い 設 、「 の S S 穂 「 じ  
「 「 よ 、「 ン だ 穂 「 じ  
「 「 同 、「 っ 穂 「 じ  
「 「 事 穂 「 じ

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

海野「きつとそうよ。なんとかしてあげたい。」

山口「まさか」

大穂「まあ、そうかもしれない。だから、ヒ

海野「何も無い宇宙空間で、たった一人で漂

山口「まあ、そうだな」

でしょ、そのロボット達、人と同じに」

海野「そう、同じ事。自我を持った存在なん

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

海野「何とかなるんですか？」

大穂「博は生きていますよ。それに、ひよつとく訳には：：」

山口「何とかって：：。そのヒロシ、ええと、大穂「筑波博だ」

山口「そう、筑波先生、今も生きていますかどうかも分からないし、第一、生きていたっ



タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

テ　○　筑波博宅・室内（昼）  
ロ　ッ　プ「2058年6月25日、東京郊外」  
　　筑波博の家。郊外の日本家屋。いつもの  
　　ように縁側で座って外をぼんやり眺めて  
　　いる筑波博。その側に、大穂、山口、海  
　　野と、筑波美由紀（37）。  
　　大穂「よお、博。俺だ、穰だ。会いに来てや  
　　ったぞ。分かるか？」  
　　筑波博、ゆっくりと声の方を向くが、直

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

山 口 一 今日 は 突 然 押 し 掛 け て し ま っ て 、 す い  
だ い て 、 あ り が と う ご ざ い ま す ー  
美 由 紀 ー い え い え 。 ま た 父 に 会 い に 来 て い た  
ん で 、 す い ま せ ん ー  
こ ち ら こ そ 、 あ れ 以 来 、 ほ と ん ど 顔 を 出 さ  
大 穂 ー い や い や 、 美 由 紀 さ ん 。 お 気 遣 い な く 。  
う な ん で す 。 母 が 亡 く な っ て 以 来 ー  
美 由 紀 ー 大 穂 先 生 、 す い ま せ ん 。 ず っ と 、 こ  
ぐ に 目 を 離 し 、 再 び 外 を 眺 め る 。

ません（会釈する）

海野 「（会釈して）すみません」

美由紀 「いえいえ。父も、賑やかな方が、嬉しいでしょう。では、ごゆっくり」

美由紀が奥の部屋へ下がる

海野 「（小声で）ねえ、宏志。こんなんで大丈夫

夫なの？ 実際」

山口 「（小声で）さあ、僕には分からないよ」

大穂 「まあ、大丈夫だろう。……多分」

一同、顔を見合わせる

博の方を向いて

大穂 「やあ、博。今日はな、ちよつとお願い  
があつて、やつて来た。ちよつと、データ  
を取らせてもらうよ。お前のソノミの為に  
な」

博 「（びくつと反応して） ……ソノミ？」

海野 「あつ、反応したっ」

山口 「筑波先生、初めまして。山口と言いま  
す。あなたと同じ、ひろし、つて言います。  
ソノミさんから、……多分、あなたの作ら

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

大 博 海 博  
穂 「 た ノ さ の 野 博  
「 ソ が ノ ミ さん の 野 「 ま れ  
「 お が ミ さん と 、 初 「 した、  
お っ て さん と メ 宏 め ソ ソ ノ ソ  
、 ソ い は 、 ル の 志 ま ノ ミ さん  
博 ノ ま す 「 あ の 貫 して 。 ？  
。 が ； ； ； ； ； ； ； ； ； ； ；  
分 ； ； ； ； ； ； ； ； ； ； ；  
か ； ； ； ； ； ； ； ； ； ； ；  
か ； ； ； ； ； ； ； ； ； ； ；  
？ ； ； ； ； ； ； ； ； ； ； ；  
ソ ； ； ； ； ； ； ； ； ； ； ；  
ノ ； ； ； ； ； ； ； ； ； ； ；  
ミ ； ； ； ； ； ； ； ； ； ； ；  
だ ； ； ； ； ； ； ； ； ； ； ；  
。 ； ； ； ； ； ； ； ； ； ； ；  
お ； ； ； ； ； ； ； ； ； ； ；  
前 「 い ソ の ミ つ 貫 い

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

の	海				博						
、	ノ				ー	る	覚	ミ	が		
こ	、	か	博	ミ	ソ	ん	め	だ	4		
の	え	り	の	か	ノ	だ	た	°	0		
人	、	と	目	°	ミ	ぞ	ん	ソ	年		
ー	何	し	に	あ	:	ー	だ	ノ	前		
	?	て	生	の	:		ぞ	ミ	に		
	ど	く	気	ソ	ソ		、	が	、		
	う	る	が	ノ	ノ		ま	、	夢		
	し		戻	ミ	ミ		た	ロ	の		
	た		っ	な	?		お	ボ	中		
	の		て	の	あ		前	ッ	で		
	?		来	か	あ		に	ト	作		
	ど		て	ー	、		会	の	っ		
	う		、		ソ		い	ソ	た		
	し		身		ノ		た	ノ	、		
	ち		体		ミ		が	ミ	あ		
	や		も		:		っ	が	の		
	っ		し		:		て	、	ソ		
	た		っ		ソ		い	目	ノ		

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

山口「おいおい、奈美。そんな言い方はない  
だろう」  
博「ソノミが、：：復活したのか」  
大穂「（喜んで）そうだ、そうだぞ。ソノミが、  
お前のソノミが、復活したんだぞ」  
博「そうか、復活したのか。どうして」  
大穂「（少し驚いて）お、俺も詳しくはよく分  
からないんだが：：お前が作ったあのロボ  
ット、市販したロボットがあったろ」

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

		大	博			大	博
ソ	し	穂	「	ソ	体	緯	穂
ノ	て	「	千	ノ	、	か	だ
ミ	、	そ	体	ミ	一	分	「
の	：	う	？	が	カ	か	そ
自	：	だ	一	復	所	ら	だ
我	ど	°	カ	活	に	ん	、
が	う	そ	所	し	集	が	そ
復	や	こ	に	た	ま	、	の
活	ら	に	？	よ	っ	そ	ロ
し	そ	ソ	「	う	た	の	ボ
て	れ	ノ		だ	ん	ロ	ツ
：	を	ミ		「	だ	ボ	ト
：	ひ	の			そ	ツ	だ
い	な	デ			う	ト	°
や	形	ー			だ	が	ど
、	に	タ			°	お	う
生	し	が			そ	よ	い
ま	て	融			れ	そ	う
れ	、	合			で	千	経

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

博 た  
大 穂 「ソノミの：：自我が：：生まれた？」  
山 口 「はい、筑波先生。どうも、いろいろな  
事 を 総 合 し て 考 え る と 、 そ う 思 え る ん で す 」  
大 穂 「多分、数が：：：ニュートロン数が鍵だっ  
博 た さん だよ。博」  
博 「数？：：：そうか、数か。千体なら：：：1  
0 億！そうか、百億か。数だったのか、  
ハハハハっ」

筑波未来（100）部屋に入ってくる

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

博 「ああ、未来か。どうした？」

未 未来 「：：あ、はい」

海 野 「こんにちは。未来ちゃん、って言うの？」

山 口 「こんにちは」

は 「」

未 未来 「あ、：：（恥ずかしそうに）こんにちは

に ちは 「」

大 穂 「（振り向いて）おお、未来ちゃん。こん

い ちゃんなの？」

未 未来 「おじいちゃん？：：この笑い声、おじ

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

美 未 美 未 未  
由 来 由 来 来  
紀 美 紀 が 紀 紀  
「 由 ( どう 紀 が 来 紀 未  
一 紀 ( どう し 紀 が 来 紀 未  
体 ) ) し た 紀 が 来 紀 未  
、 、「 い た 紀 が 来 紀 未  
ど 未 、「 い た 紀 が 来 紀 未  
う 来 、 、「 い た 紀 が 来 紀 未  
し 現 、「 い た 紀 が 来 紀 未  
た れ る 、「 い た 紀 が 来 紀 未  
っ 、「 い た 紀 が 来 紀 未  
て 、「 い た 紀 が 来 紀 未  
い 、「 い た 紀 が 来 紀 未  
う 、「 い た 紀 が 来 紀 未  
の 、「 い た 紀 が 来 紀 未  
（ 博 を 見

未 来 「お、おじいちゃん？  
：  
：  
大 変 。  
お 母 さ

未 来 「お、おじいちゃん？  
：  
：  
大 変 。  
お 母 さ

未 来 「お、おじいちゃん？  
：  
：  
大 変 。  
お 母 さ

未 来 「お、おじいちゃん？  
：  
：  
大 変 。  
お 母 さ

未 来 「お、おじいちゃん？  
：  
：  
大 変 。  
お 母 さ

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

博 「やあ、美由紀さん」  
未来 「ね、大変でしょ」  
美由紀 「お父さん、どうしたんですか、一体」  
博 「（当惑して） どうしたって……」  
大穂 「博、お前…… 惚けてたんだぞ、今まで」  
博 「惚けてた？ …… そうか、思い出した。そ  
うだな。惚けてたか。 …… あいつを、園美  
を失って、 …… 生きる意欲を失ってしまっ  
た」

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

大穂「ハハハっ。お前は変わらんなあ。まるで、40年前と同じじゃないか」

美由紀「え？何ですか？40年前って」

大穂「お前は40年前も、園美さんを失って、を、儚んで夢の中に逃げていたよな」

未来「え？夢？」

博「40年前：：そうだ、そうだった」

大穂「で、あの時も、今回も、ソノミに助けられる訳だ。ハハハハっ」

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

未来「あ、パパ、帰って来た」

美由紀「あ、健太郎さんが帰って来たみたい。」

筑波健太郎（39.04）「ただいま、おい、美由紀、健太郎（39.04）」

未来「おじいちゃんとおばあちゃんに、そんなことがあったの」

博「あ。若き日の過ち、つてやつかな」

美由紀「そんな事があったんですか」

\* \* \*

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

美由紀、未来、部屋を出て行く

海野「あの、大穂先生。今回の用件を」

大穂「ああ、そうだった」

山博「用件？」

山口「そうです」

大穂「大穂、山口、海野、顔を見合わせて

大穂「そうだ、そうなんだ。お前が惚けてた

んで、どうしようかと思っただが……、

お前、ソノミの、生まれ変わったソノミの

為に、データを取らせてくれないか」



タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

海野 「私に、私たちにそれをやらせてください」

山口 「（慌てて）私たち？おい、奈美、何を」

海野 「言い出しっぺは私です。私が、私たちが、責任を持って届けます」

山口 「だから、私たちって、誰だよ」

博 「行けるなら：：僕も一緒に連れて行って

くれないか」

大穂 「おい、博」

健太郎、部屋に入ってくる

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

健太朗「父さん、何言ってるんです。その歳で」  
大穂「この件、俺に任せてくれないか。俺に  
考えがある」  
○ 携帯端末映像（室内）  
月面基地の室内からの映像。地上とそれ  
ほど変わらない室内。背景には調査機材  
が映り込んでいます。三沢正行（30）が映  
っている。身振り、手振りを交えながら

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

三  
沢「やあ、奈美ちゃん。元気かい。こんな  
話し続ける。  
風に奈美ちゃん。メール交換が出来るなん  
て、嬉しいよ。そう、奈美ちゃん、今  
度、こっち、来るんだって？驚いたよ。一  
応、インターン研修、ってことになつて  
んだって？インターンで月なんて、普通、  
あり得ないよな。一体、どんな魔法、使っ  
たんだい。俺だって、ここに来るのに、こ  
の会社で、結構、苦労したんだぜ。苦労し



タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

出来るんだい？まあ、そんなこともあって、  
こっちに呼ばれたんだと思うけど。期限も  
だんだん近づいてるし、あまりもう、余裕  
がなくなってきた。奈美ちゃんがこっち  
へ来れば、きつと進展するんじゃないかと  
思ってる。期待してるよ。そんなこともあ  
って、奈美ちゃん関連の一連の諸々を、こ  
っちは、コードネーム『ソノミ』、『ソノ  
ミプロジェクト』って呼んでるよ。『ソノミ  
プロジェクト』開始だなー

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

			テ	○		三
			研	ロ		ね
海	業	だ	修	ッ	研	「
野	服	だ	セ	プ	修	じ
、	の	っ	ン	「	セ	や
携	海	広	タ	2	ン	、
帯	野	い	ー	0	タ	月
端	が	室	「	5	ー	で
末	座	内		8	室	待
を	っ	空		年	内	っ
閉	て	間		7	(	て
じ	い	°		月	昼	る
る	る	壁		3	)	よ
。	。	際		日		。
		の		、		ま
		ベン		筑		た
		チ		波		連
		に		・		絡
		作		宇		す
				宙		る

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

○ 研修室内（昼）

山口（オホチ）「奈美、そろそろ休憩終わるよ」

海野「うん、今行く」

壁際のベンチから立ち上がって、山口の方へ歩き出す

海野（N）「軌道エレベーターが出来て、宇宙へ行くのは昔ほど大変じゃなくなっただ。いとはいえ、壁の向こうは真空の世界。いざと

いうときの為に、研修と訓練は必修だ」

南条「が二人の相手をしている。南条みどり（27）」  
教室くらいの広さの部屋。海野と山口が、  
宇宙服を試着している。南条みどり（27）  
が二人の相手をしている。  
南条「これが、我が社の新製品の宇宙服よ。  
あなた達には、この宇宙服のモニターをし  
てもらおうわ。後でレポートを書いて頂戴ね。  
さて、この宇宙服だけど、今までのものと  
違って、服の素材自体が収縮して真空内で  
も必要な内圧を確保している。お陰で、  
今までの風船みたいな宇宙服みたいに動き

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

南 山 海  
条 う っ 口 野 軽 に  
「 か っ ー ー く く  
そ う て ん ー ほ て く  
ね 、 、 と 、 動 ー ない  
、 、 、 、 動 き の  
そ れ が 普 通 の 宇 宙 服 よ ね 。 地 上 の 服 を 来 て る み た い に 、  
普通 の 宇 宙 旅 行 時 代 に 先 駆  
の 宇 宙 服 は 、 本 格 的 な 宇 宙 旅 行 時 代 に 先 駆  
た か ら 対 G 訓 練 な ん か は ほ と  
け た 、 宇 宙 旅 行 者 向 け の も の 。 エ レ ベ  
ー タ ー が 出 来 た か ら 対 G 訓 練 な ん か は ほ と

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

山  
口  
「  
ボ  
タ  
ン  
？  
こ  
れ  
か  
な  
（  
ボ  
タ  
ン  
を  
押  
す  
）  
」  
て  
み  
て  
「  
が  
必  
要  
な  
の  
よ  
。  
左  
腕  
に  
あ  
る  
、  
ボ  
タ  
ン  
を  
押  
し  
が  
必  
要  
な  
カ  
ジ  
ユ  
ア  
ル  
な  
、  
そ  
ん  
な  
新  
し  
い  
宇  
宙  
服  
気  
軽  
に  
カ  
ジ  
ユ  
ア  
ル  
な  
、  
そ  
ん  
な  
新  
し  
い  
宇  
宙  
服  
と  
、  
着  
る  
の  
も  
大  
変  
で  
し  
よ  
。  
だ  
か  
ら  
、  
も  
っ  
と  
か  
し  
ら  
。  
そ  
れ  
が  
昔  
み  
た  
い  
な  
ご  
っ  
い  
宇  
宙  
服  
だ  
の  
、  
豪  
華  
客  
船  
に  
お  
け  
る  
救  
命  
胴  
衣  
、  
っ  
て  
感  
じ  
宙  
服  
は  
必  
要  
よ  
ね  
。  
ち  
よ  
う  
ど  
昔  
で  
言  
う  
と  
こ  
ろ  
真  
空  
の  
宇  
宙  
空  
間  
、  
い  
ざ  
と  
い  
う  
時  
の  
為  
に  
、  
宇  
ん  
ど  
不  
要  
に  
な  
っ  
た  
ん  
だ  
け  
ど  
、  
や  
っ  
ぱ  
り  
外  
は

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

			南	海	山				海
防	で	苦	条	野	口				野
ぐ	も	し	「	「	「	て	に	山	「
の	、	い	驚	き	わ	い	密	口	え
「	こ	か	いた	や	っ	て	着	、	ど
	の	も	た	っ	、	、	す	海	れ
	圧	し	？	、	な	首	る	野	？
	力	れ	こ	な	ん	か	。手	の	こ
	で	な	れ	に	だ	ら	足	宇	れ
	血	い	が	？	、	上	も	宙	？
	液	け	、	ち	こ	だ	手	服	（
	な	ど	本	よ	れ	け	袋	が	ボ
	ど	、	来	っ	「	、	、	収	タ
	の	真	の	と		出	長	縮	ン
	体	空	状	苦		て	靴	し	を
	液	の	態	し		い	で	だ	押
	の	宇	よ	い		る	覆	し	す
	沸	宙	。少	「			わ	て	「
	騰	空	し				れ	身	」
	を	間						体	

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

海野「え、何？身体の形？」  
山口「でも、動きやすいですね、これ。収縮  
したら、もつと軽い感じ。な、奈美」  
海野「ほんと、動きやすいわ、これ。え、何？  
山口、奈美の方を向く  
山「自分の身体を見る。密着していて、身体  
の線が露になっっている」



タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

			○	山	海	山	海
				口	野	口	野
端	ッ	研	宿	「	「	「	「
末	ド	修	泊	い	う	宇	「
を	の	セ	室	ゃ	ん	宙	じ
取	上	ン	内	っ	、	っ	ゃ
り	に	タ	(	ほ	何	た	な
出	座	ー	夜	「	か	ら	い
し	っ	の	)		、	、	り
、	て	宿			楽	や	、
前	い	泊			し	っ	い
に	る	室			い	ぱ	ざ
置	。	の			「	、	、
く	お	個				こ	っ
。	も	室				う	て
メ	む	。				だ	言
ガ	ろ	海				よ	う
ネ	に	野				ね	と
ケ	携	、				「	き
ー	帯	べ					の
							為
							な

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

なる。やがて手は動かさないで操作するようになり。中で動かして、操作する。最初だけで、浮いて見える。仮想キーボードを手を空メガネ越しの画面の映像。宙に半透明で\* \* \* える。メガネ越しに手元に仮想キーボードが見出し掛ける。サングラスをかける際、スから左右の色が違うサングラスを取り

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

海野（オハノ）「この一通のメールから、全てが  
始まったのよね」  
以後、ソノミ（「」相当）の声と同じ文面  
が、空中の仮想画面上のウインドウに描  
かれる。  
ソノミの声「ヒロシさん、ソノミです。あな  
たはどこですか？」  
\* \* \*  
ソノミ（声）「奈美さんですか。ソノミです。  
ヒロシさんにメールをかいて、奈美さんか



タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

ソ  
ノ  
ミ  
（声）「ヒロシさん、見つかったって、

\* \* \*

確  
か  
め  
て  
来  
て  
く  
だ  
さ  
い  
。返  
事  
、待  
っ  
て  
ま  
す  
。」

ソ  
ノ  
ミ  
が  
捜  
し  
て  
い  
る  
ヒ  
ロ  
シ  
さ  
ん  
か  
ど  
う  
か  
、

す  
。今  
度  
、会  
い  
に  
行  
っ  
て  
く  
れ  
る  
ん  
で  
す  
ね  
。

か  
っ  
た  
っ  
て  
。あ  
、ご  
め  
ん  
な  
さ  
い  
。ソ  
ノ  
ミ  
で

ソ  
ノ  
ミ  
（声）「本当ですか？ヒロシさんが見つ

\* \* \*

ろ  
し  
く  
お  
願  
い  
し  
ま  
す  
。」

う  
っ  
て  
本  
当  
で  
す  
か  
？と  
て  
も  
嬉  
し  
い  
で  
す  
。よ

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

ソ  
ノミ（声）「ホントですか？ヒロシさんがソ  
ノミに会いに来てくださいか？夢見た  
いです。早くヒロシさんに会いたいです。  
そうそう、奈美さんも、あなたヒロシさ  
んと一緒に、ソノミに会いに来てくれるん  
ですよね。楽しみですよ。早く会いたいな。」  
ヒロシさんに会いたいです。」  
いす。奈美さん、ホントにありがとう。  
本当ですか。信じられない。ほんとに嬉し

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

海  
野  
（オフ）  
ーソノミさん、  
こんばんは。  
奈美  
で  
す。  
い  
よ  
い  
よ  
明  
日、  
ソ  
ノ  
ミ  
さ  
ん  
の  
所  
に  
向  
か  
い  
ま  
す。  
私  
の  
ヒ  
ロ  
シ  
も  
一  
緒  
で  
す。  
ソ  
ノ  
ミ  
さ  
ん  
の  
ヒ  
ロ  
シ  
も  
私  
た  
ち  
と  
一  
緒  
に  
行  
き  
ま  
す。  
ソ  
ノ  
ミ  
さ  
ん  
に  
会  
え  
る  
日  
を  
楽  
し  
み  
に  
し  
て  
い  
ま  
す。  
ー

想  
キ  
ー  
ボ  
ー  
ド  
上  
で  
打  
ち  
込  
ま  
れ  
て  
い  
る。  
海  
野  
の  
声  
と  
同  
じ  
文  
面  
が、  
仮  
想  
画  
面  
上  
に  
順  
番  
に  
表  
示  
さ  
れ  
る。  
同  
時  
に、  
画  
面  
下  
で  
は  
仮

\*  
\*  
\*

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

海野 「これでよしつと、送信！」

送信操作をして、メールが送信されるイ

メール

○ 軌道エレベーターション

テ ロ ッ プ 「2058年7月18日、軌道エレ

ベ ー タ ー ・ 上 層 ス テ ー シ ョ ン

宇宙ステーションの展望台。ガラス越し

に、頭上遙か彼方に小さく地球が見える。

床が地球から見て宇宙方向、逆さになっ

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

海野「とうとう来たのね、私たち。うわーっ、地球があんなに小さく……って、え？ 何で地球が頭上にあるの？ そう言えば、そもそも何で宇宙なの？ 無重力じゃないの？」

山口「んもう、お前に掛かると折角の感動が」

力。ているが、重力は足の方角にあり、低重力。自動ドアが開くと、数人と一緒に、展望台に入ってくる海野と山口。

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

山 海 山 海  
口 野 口 野  
は ー どう  
静 ー せ、  
止 ー 無  
軌 道 上 に あ っ て、 遠 心 力 で 外 側 に 押 し  
道 の ステ ー シ ョ ン は、 静 止  
ス テ ー シ ョ ン だ そ う だ か  
の 回 転 力 を 利 用 出 来 て、 有 利 な そ う な。 到  
当 た る ら し い。 地 球 を 脱 出 す る の に、 地 球  
山 口 ー こ こ は、 ス ペ ー ス ポ ー ト の 出 発 口 に も  
な ん だ か ら、 無 重 力 が 楽 し め れ ば い い の に」  
海 野 ー 何 で わ ざ わ ざ そ ん な 所 に？ 折 角 の 宇 宙  
付 け ら れ て い る よ う な 状 態 ら し い よ」



タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

山 海 山 海  
口 よ 随 ト 野 の だ 口 野 暫  
「 つ 分 レ 「 の し 「 「 し 暫  
お と 熱 イ そ よ 、 ラ そ 地球  
い 焼 心 ン そう だ ー 石 ウ ン 言 球  
お け に の 中 の ー に ジ え 無  
い 。 話 中 の 。 あ の 休 ば 、 言  
僕 程 込 先 言 歳 お 先生 眺  
に と 睨 ん 生 言 だ 。 も 生 め  
と む だ 何 と ば 、 ど ろ ろ 二  
つ ー だ 話 ば 、 エ っ っ 人  
て 、 話 した べー ター  
筑 波 先生 は 、 ち ?

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

海野 みたいたいだけど？

山口 「おいおい、勘弁してよ。少しの間だけ」

海野 「(ちよっとすねて) その間、アタシをほ

間 話をしたよ。実際に興味深くて、有意義な時

な。同じ分野の研究者として、いろいろと

いわば教科書に載っているような人だから

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

		○		海	山		海	山
				野	口		野	口
フ	ス	ラ	そ	「	「	文	「	「
ア	テ	ウ	う	ソ	ま	通	ふ	お
ー	ー	ン	言	ノ	さ	を	ふ	い
ベ	シ	ジ	っ	ミ	か	ね	ふ	お
ッ	ョ	室	て	と	お	「	っ	い
ド	ン	内	ウ	ね	前		、	、
な	の		イ	「	「		も	冗
ど	ラ		ン				ち	談
が	ウ		ク				ろ	だ
あ	ン		す				ん	ろ
り	ジ		る				、	う
、	。		海				冗	？
数	ソ		野				談	「
人	フ						よ	
が	ア						。	
休	ー						ち	
ん	ヤ						よ	
で	ソ						っ	

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

博 「じゃあ、行ってくるよ」

○ 筑波博の自宅玄関前。庭のある日本家屋。

筑波博宅・玄関前（朝・回想）

筑波 「の座輝い。窓の外には宇宙の星空と、地球が外を見ている。筑波博がソファに深く」

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

健 太朗「父さん、本当に行かれるんですか？」  
美 由紀「あなた、今更何を」  
博 「ああ（頷く）」  
未 来「おじいちゃん、気をつけてね」  
博 「ああ、ありがとう」  
健 太朗「本当は、私が一緒について行きたい  
所ですが、今、手が離せなくて。ちよつと  
気になるデーターがあつて」  
博 「いや、お前は自分の仕事をするといい。」

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

博 (オホハ) 「多分最後の……」

○ ラウンジ室内 (回想から戻る)

博 「……わがままか……違うない」

博 (オホハ) 「ソノミ……」

○ 月面基地・ロビー (昼)

月面の日本の基地内。ロビーになってい

る。自動ドアが開き、海野、山口、筑波

ら数人が入ってくる。大曾根登志男 (45)、

三 沢ら基地の駐在員が数人、出迎える。  
大 曾 根 「（お辞儀をして）筑波先生、お待ちし  
ておりました。遠路はるばる、この月面基  
地 研 究 所 に よ う こ そ ー  
三 沢 「奈美ちゃん、（咳払い）いや、山口さん、  
海 野 さん、ようこそ、月面研究所へ」  
筑 波 「おお、大曾根君か、久しぶり。元気に  
や っ て る よ う だ ね 。 今 回 は 僕 の わ が ま ま に  
つ き 合 っ て く れ て 、 あ り が と う （お辞儀す  
る）」

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

大曾根 「いえいえ、先生の頼みとあれば、何  
なりと」  
筑波と大曾根、話し込む  
海野と山口、三沢に近づいて  
海野 「（小声で）三沢先輩、どういうことなん  
ですか？」  
三沢 「（小声で）どうやら、うちの所長は、筑  
波先生の教え子なんだそうだ」  
山口 「（小声で）そうなんですか？」  
三沢 「（小声で）ああ。ついでに、うちの社長

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

は、大穂先生の教え子で、おまけに重役連  
中とか、お偉いさんの中にも、結構、教え  
子がいるらしい」  
海野「（小声で）えっ、あの先生って、そんな  
に偉い人だったんですか」  
山口「（小声で）だから説明しただろう、教科  
書に載るような人なんだって」  
海野「（小声で）へえー、本当にそうだったん  
だ」  
三沢「（小声で）いったいどうやってあんな大

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

先生と知り合いになつたんだい？ 奈美ちゃん  
の魔法の種は、これだったのかい？」  
海野「（小声で）エヘッ（笑顔をみせる）」  
○ 月面基地・会議室（昼）  
テ ロ ッ プ 「 2 0 5 8 年 7 月 2 5 日、月面基地  
研究所、会議室」  
月面基地の会議室。総勢 3 0 名位の人たち  
ちが会議に臨んでいる。正面のスクリーン  
に、ISSの予定軌道やスケジュール

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

利  
根 川 一 郎 は、計 画 を 説 明 す る 。 知 っ て の 通  
り、本 I S S 移 設 計 画 は、予 想 外 の ト ラ ブ  
ルで大き くな っ てい る 。 移 設 予 定 の ス テ ー  
ション内 に違 法 に投 棄 さ れ ていた 人 型 ロ ボ  
ット群、通 称 ソ ノ ミ が、ス テ ー シ ョ ンの コ  
ン トロ ー ル を 奪 い、一 切 の 干 渉 を 許 さ ない  
状 況 にな っ てい る 。 国 際 宇 宙 開 発 機 構 か ら

（OSG）が、スクリーン前に立って、説明  
などの情報が表示されている。利根川翼

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

利根川「そこで、これを解決する為に、地球  
来ちゃったけど、大丈夫かな？」  
山口「（小声で）ちょっとした冒険旅行気分  
海野「（小声で）なんか、大変な事になってる  
用にも関わる問題だ」  
後ろの方の席に、海野、山口が座って、  
しては、これ以上の遅延は許されない。信  
本プロジェクトを請け負っている我が社と

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

から助っ人を呼ぶ事にした。海野君、山口君、こっちに（手招きする）「  
海野「（驚いて）え、は、はい」  
山口「（驚いて）あ、はい。分かりました」  
兩名、小走りで正面に向かう。が、低重  
力に慣れない為、大きく飛び跳ねる  
山口「わっ」  
海野「きゃっ、何？」  
利根川「ああ、慌てなくともいいから。落ち  
着いて。慣れるまでは誰でもそうなるんだ」

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

的 君 | 利 山 海 利  
に は イ ン タ ー シ ャ ッ プ 研 修 と い う 事 で 来  
る 。 正 面 に つ い て 、 皆 の 方 を 向 く  
ゆ っ く り と 着 地 し て 、 ゆ っ く り 歩 き 始 め  
る 。 正 面 に つ い て 、 皆 の 方 を 向 く  
利 根 川 「（手 で 指 し 示 し な が ら） え え と 、 海 野  
君 と 、 山 口 君 。 大 学 院 の 学 生 さ ん だ 」  
海 野 「あ 、 ど う も 、 海 野 で す （会 釈 す る）」  
山 口 「山 口 で す 。 よ ろ し く （会 釈 す る）」  
利 根 川 「（頷 い て） え え と 、 海 野 君 は コ ン ピ ュ  
ー タ の 専 門 家 、 専 門 は ネ ッ ト ワ ー ク 、 山 口  
君 は 人 工 知 能 が 専 門 だ そ う だ 。 一 応 、 形 式

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

計画自体はこれと並行して進める。移設実  
ククト『と名付け、実行する事にする。移設  
ククトのサブプロジェクト、『ソノミプロジェクト  
うことにした。そこで、これを本プロジェクト  
い、移設計画の最大の障害を解決してもら  
う、言う訳で、ソノミと直接交渉をしても  
と、いうことで、何かの役に立つだろう。そ  
て、いるそうだけだ。山口君は、専門が人工能  
どうやら唯一、ソノミとコンタクトが取れ  
てもらったが、それは建前だ。海野君は、

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

三				海					
沢				野	っ	あ	ら	な	行
ー	三	め	海	ー	て	、	い	い	は
や	沢	る	野	あ	ー	海	た	°	来
あ	、	°	、	、		野	い	各	月
、	後	利	山	は		君	°	自	2
奈	ろ	根	口	い		、	で	、	0
美	の	川	、	ー		山	は	計	日
ち	席	は	後			口	、	画	、
や	近	説	ろ			君	計	実	こ
ん	く	明	の			°	画	現	れ
、	で	を	席			も	の	の	以
山	二	続	に			う	詳	た	上
口	人	け	向			い	細	め	の
君	に	る	か			い	に	、	遅
、	近	°	っ			よ	っ	頑	れ
僕	づ		て			、	い	張	は
が	い		歩			席	て	っ	許
今	て		き			に	、	て	さ
回			始			戻	あ	も	れ

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

の研修中、というかプロジェクトの間、君  
たちの面倒を見る事になったんで、よろし  
く。困った事があつたら、何でも言つてく  
れて、いいからね」  
海野「ちよつと、三沢先輩、奈美ちゃんはや  
めてくれませんか？」  
三沢「なんで？ いいじゃん、いいじゃん、奈  
美ちゃん」  
海野「ちよつと馴れ馴れしいですよ、三沢せ  
んぱい」

不信の目で三沢を見つめる山口。三沢、  
それに気付いて

三沢 「あ、そう。そういうこと。(ニヤツとし  
て) 何、彼氏？」

海野 「(不機嫌そうに目をそらして) そうです  
よ」

三沢 「ああそう、そうなんだ。山口君、君も  
大変だね(にやにやする)」

山口 「い、いえ、そんな事、全然」

海野 「(声を荒げて) ちよつと、三沢先輩！」

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

利根川 「そこ、うるさい。まだ会議中だよ」

海野 「あ、すいません」

利根川、会議を続ける

海野 「（小声で）三沢先輩のせいで、怒られちゃったじゃないですか」

三沢 「（小声で）ああ、ごめんねえー」

不信の目で見つめる山口

山口 「（小声で）奈美、ちょっと」

山口、海野を連れて、会議室を出る

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

○ 月基地研究所・廊下

会議室前廊下、ベンダークォーター。自販機が数台並んでいる休息スペース。

山口「奈美、何なんだ、あいつ。三沢とお前、海野どういう関係なんだ？」

「別にあ、自販機がある。宏志、何飲む？」

山口「自販機に向かい、物色する海野ないか？」

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

海野 「（自販機を操作しながら）何も」

自販機で缶コーヒーを2本買う

海野 「はい、これ」

コーヒーを一缶、山口に投げてよこす

山口 「ああ、それを受け取る

海野 「まあ、それでも飲んで、落ち着きなよ」

海野、自分の缶をあけて、一口すすする。

それを見て、山口も缶をあけて飲む。

海野 「……昔の彼氏。一年の時のね」



タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

海野「そう。今回の事がなければ、連絡しな  
山「少して、他に知り合いはいなかったか  
山「迷ったけど連絡をとって見たの  
海野「本当だよ、信じて。今は宏志、キミ一  
山「本当？」  
海野「ホント」  
海野、不意に山口に近づき、キスをする。







タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

海野 「気持ちちが、恋する気持ちちがわかるから  
： 私も、私も同じ、宏志が好きだから」  
山口 「奈美：」  
両者、再び後ろを向いて、向き合う  
山口 「やろう、奈美。ソノミに博さんを会わ  
せてやろう。そして、博さんのデータと一  
緒に、旅立たせてやろう」  
海野 「（笑顔で）うん」  
三沢 （オフ） 「ぱちぱちぱちーっ」  
二人が音の方を振り向くと、三沢がいる

海野「（慌てて）み、三沢先輩、いつからそこに」

三沢「いったったかなあ？ ついさつき」

山口「（恥ずかしそうに）聞いていたんですか」

三沢「（戯けて）ダメだよ君たち。ここは公の場所なんだから、こんなところで内緒話なんかしちゃ。誰が聞いているか、分かんないよ」

海野「（恥ずかしそうに）ば、ばか」

三沢「（一転、真面目に）まあ、話は分かった。

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

○ 三 海  
君 野 相 君  
た 野 応 た  
ち ー 応 の ち  
が ー 先 の 対 対  
が 輩 応 を し 言  
そ う 言 う 覚  
悟 なら、こ  
っ ち も そ  
れ  
見 じ 三 海  
せ ー 沢 野 相 君  
て ー ー ー ー ー  
や ー ー ー ー ー  
る ー ー ー ー ー  
さ ー ー ー ー ー  
（ 不 敵 に 笑 う ）  
I S S 博 物 館 外 観 （ 宇 宙 空 間 ）  
宇 宙 空 間 に 浮 か ぶ 、 宇 宙 ス テ ー シ ョ ン 、  
じ ゃ な い か 。 こ っ ち は プ ロ フ ェ ッ シ ョ ナ ル  
な ん だ ぜ 。 社 会 人 の 、 プ ロ の 仕 事 っ て 奴 を 、  
沢 ー な に 不 思 議 そ う な 顔 し て る ？ 当 たり 前  
野 ー 先 輩 ？  
相 応 の 対 応 を し な く ち ゃ だ ね  
君 ー ー ー ー ー

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

○

て	す	無	っ	チ	I	I	き	I
い	る	重	て	が	S	S	、	S
る	°	量	く	開	S	S	ド	S
°	へ	状	る	き	の	博	ッ	博
	ル	態	°	、	内	物	キ	物
	メ	の	密	三	部	館	ン	館
	ツ	中	着	沢	の	内	グ	の
	ト	、	性	、	薄		す	外
	の	空	の	山	暗		る	観
	ラ	中	新	口	い			°
	イ	を	型	、	エ			小
	ト	浮	宇	海	ア			型
	だ	き	宙	野	ロ			宇
	け	な	服	の	ッ			宙
	が	が	を	順	ク			船
	照	ら	着	で	°			が
	ら	移	て	、	ハ			近
	し	動	、	入	ッ			づ

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

		三		海		山		三
		沢		野		口		沢
中	エ	「	*	て	「	「	「	「
が	ア	じ			何	ら	ら	気
見	ロ	や	*		や	、	、	を
え	ツ	、			っ	そ	ぶ	つ
始	ク	開	*		て	う	つ	け
め	の	け			ん	言	か	て
る	I	る			の	つ	ら	°
°	S	よ			よ	て	な	い
明	S	「			、	も	い	ろ
か	側				宏	、	こ	ん
り	の				志	は	こ	な
が	ハ				°	「	っ	も
な	ッ				さ	ち	ち	の
く	チ				っ	は	は	が
、	が				さ	素	人	一
内	開				と	人	な	杯
部	き				行	ん	ん	あ
は	、				っ	だ	る	る

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

			三		三	海	山	
			沢		沢	野	口	
体	ボ	明	「	な	不	「	「	暗
の	ッ	か	な	る	意	あ	真	い
ロ	ト	り	、		に	る	っ	
ボ	が	の	な		、	ん	暗	
ッ	横	中	ん		明	だ	だ	
ト	た	、	だ		か	が	「	
が	わ	通	？		り	、		
接	っ	路	ど		が	点	の	
近	て	の	う		点	か	？	
し	い	壁	し		い	な	「	
て	る	際	た		て	い		
く	°	に	ん		、	「		
る	そ	無	だ		内			
°	の	数	？		部			
(ソ	中	の	「		が			
ノ	で	人			明			
ミ	、	型			る			
1	一	ロ			く			

タイトル『彼方からの手紙』ーシナリオ

ソ 海 ソ  
ノ 野 の ノ  
「 お ミ だ 幾 は  
1 あ 仲 ミ が 分 、  
「 間 さ ー 低 ロ ボ 量  
は た さん 品 ポ ッ 産  
「 ソ ー 位 ッ ト 型  
、 ノ ち っ し 、 的 な の  
い や 、 ー 姿 や 無  
、 ー の ？ ー 私 が 機 械 的 な 発 声 〽 個 性 で  
「 案 内 し ます ー 奈 美 さん と そ 声 も 同 じ 声  
私 たち 代 表 する ソ ノ ミ の 個 体 ソ ノ ミ

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

元にご案内します。どうぞこちらへ」  
山口「なるほど。群体だから、全体で一つだ  
が、代表が存在する訳か」  
海野「なに考え込んでいるの。行くわよ」  
山口「あ、ああ」  
三沢「流石は奈美ちゃん。今までこんな事、  
なかつたよ」  
ソノミ「1の後について移動する一行  
一行が近づくと、明かりが点き、過ぎ去  
ると明かりが消える。そこかしこに、ほ

○

ぼ 同型のロボットが横たわっている。た  
だし、ほとんどが手や足など、どこかを  
欠損している。  
I S S ・ 気密室  
扉が開き、中に入ると、明るい、少し広  
い空間に出る。空気がある事を確かめて、  
ヘルメットを外す一同。その部屋だけ、  
片付けられていて、中に、それまでとは  
少し違う、人型女性形のロボットが浮い

て  
いる。  
（プロトタイプは、姿形や動作が  
より人間的。発声もより人間的で自然）

海野「あなたがソノミさん？」

ソノミ「ああ、奈美さん。そしてそのお仲間  
方。よくいらっしやいました。私がソノミ、  
プロトタイプの個体のソノミです。会いた  
かった」

海野「プロトタイプ？」

山口「そうか！量産市販タイプの個体の中に、  
プロトタイプの個体もいたのか」

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

ソノミ「ヒロシさん、ヒロシさんはどちらで  
山口「あた？」  
海野「手作りって、：：じゃあ、筑波先生の  
プロットか試作するのが普通なんだ。それが  
山口「いきなり量産する前に、研究の為に、  
海野「プロットタイプって？」

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

ソノミ「(がっかりして)そうですか……ヒロ

山口「ヒロシは僕だけど……」

海野「(遮って)ソノミさん、このヒロシは私

の宏志です。あなたのはヒロシさん、筑波博

先生は、今、月にいます。月までは来てい

ます」

ソノミ「月に……」

海野「月までは来てますが、こっちの状況が

分からなかつたんで、とりあえず私たちが

様子を見に来たんです」



タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

海野 「いい、先生の事はソノミには内緒にし  
て」  
山口 「内緒？なぜ？」  
海野 「ソノミの知っているヒロシって、今の  
先生じゃ、ないのよ」  
三沢 「今の先生じゃない？」  
山口 「そうか、昔の先生なんだ」  
海野 「そう」  
三沢 「どういうこと？」  
山口 「詳しい説明は後でするけど、要するに、



タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

ソ ノ ミ 「 あ の 、 奈 美 さ ん ？ み な さ ん ？ 」

三 沢 「 任 せ た 」

山 口 「 わ か っ た よ 」

海 野 「 私 に 任 せ て 。 何 と か 、 う ま く 説 明 し て 」

三 沢 「 じ や あ 、 ど う す る ？ 」

山 口 「 そ う だ ろ う な 」

海 野 「 け の 先 生 に 会 わ せ た ら 、 き つ と シ ョ ッ ク を 受 」

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

ソ	海	ソ	海	ソ	海	
ノ	う	ノ	野	ノ	と	野
ミ	ち	ミ	「	ミ	大	「
「	に	「	あ	「	切	円
近	会	で	り	そ	な	陣
い	え	、	が	う	話	を
う	る	会	と	で	が	解
ち	と	え	う	す	あ	い
：	思	ま	「	か	っ	て
：	い	す	さ	。	て	「
で	ま	か	ん	い		い
す	す	？	に	い		ん
か	よ	「	、	ん		な
「	「		私	で		さ
			の	す		い
			ヒ	よ		。
			ロ	「		ち
			シ			よ
			さ			つ
			ん			

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

海野 「え？」

ソノミ 「寝込むって？」

山口 「（小声で）わ、分かったよ」

私 「に任せて」

海野 「（小声で）山口に（余計な事、言わないで。」

山口 「そ、そう。寝込んでるんですよ」

ソノミ 「寝込んでいる？」

月 「で寝込んでるんですよ」

つちに來る途中で体調を崩しちゃって、今、

海野 「そ、そう。近いうち。ヒロシさん、こ

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

ソノミ「寝込むって、どういう意味ですか？」

山口「眠っているのは、違うんですか？」

山口「（小声で）寝込むという概念を知らないんだ、多分」

海野「え、ええと。そうね：：（小声で山口に）あんた、説明して」

山口「（小声で）急に振るなよ」

山口「きよとんとするソノミを直す為に、休んでいる、という事は、身体

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

海野「N」  
対話は終わりました。その後、何度かス  
海野「大丈夫よ。少し休めば、直るから」  
山口「大丈夫、大丈夫」  
海野「大丈夫よ、安心して」  
ソノミ「本当ですか？」  
海野「大丈夫よ。少し休めば、直るから」  
大変です」  
て「ヒロシさん、身体、壊したんですか？」  
ソノミ「身体を直す？（少し考え込み、慌て  
けど、：：わかる？」

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

テーションを訪れました。ソノミと打ち解け、仲良くなった私は、ソノミを説得し、ステーションの移設計画に協力させる事に成功しました。最初は計画に渋っていたソノミでしたが、ヒロシさんのデーターと一緒にいられる事、そんなに頻繁にはいかなばまた会える事、会わないまでも通信出来る事を話し、納得してもらいました。また、出発までに、本物のヒロシさんと一度会わ

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

博 ○  
美 — ソ も 暗 光 の 事 か せ  
を そ ノ も 闇 の の 件 う る  
傷 そう ミ 見 闇 の の 事 ま 事  
つ だ ミ え 闇 の の 件 が 計 も  
け 、 の ない 中 中 起 こ 画 °  
て そ 声 ない 中 中 ころ 画 は まあ、  
は そう だけ ° その 中 中 進 進 行  
い だ け が の 中 中 行 行 する  
な っ が 中 で 、 筑 波 博 (一七) と  
か っ た ° 俺 は あいつを、園  
た ° 園 美 を 守 っ た  
園 美 を 守 っ た



タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

目には涙が  
ついていた筑波、うなされて目を覚ます。  
るいが、遮光板で暗い室内。ベッドで眠  
月面基地、筑波博（72）の個室。外は明  
月面基地・個室（夜）  
○ 博  
「ソノミ、（絶叫して）ソノミー」  
： さようなら、ヒロシ  
： 園美さんとお幸せに  
ロシさんの園美さんとは別の存在なの。  
： 楽しかったよ  
：

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

○ 地球、東京の天文台の電算室。明かりが

電算室（夜）

ミ

博 「そうか、思い出した。（呟くように）ソノ

手を見つめながら

博 「これは、：：涙？」

っ て

上体を起こし、ふと気付いて顔に手をや

博 「：：夢か」

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

テ	○			健				
ロ			変	太				
ツ	月	椅	な	朗	凝	デ	を	煌
プ	面	子	事	一	視	イ	し	煌
一	基	か	に	や	し	ス	て	と
2	地	ら	な	っ	て	プ	い	灯
0	・	急	っ	ぱ	い	レ	る	る
5	作	に	た	り	る	イ	。	室
8	業	立	ぞ	か		に	筑	内
年	室	ち	一	、		映	波	で
8	(	上		間		し	健	、
月	昼	が		違		出	太	数
5	)	る		い		さ	朗	人
日				な		れ	が	の
、				い		る	目	研
月				。		数	の	究
面				こ		字	前	員
基				れ		の	の	が
地				は		列	平	作
研				大		を	面	業

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

山 海  
口 野  
「 ぶ 山 た 野 究  
終 い 口 わ ね 業 メ く 月 所、  
わ て く コ 「 し よ を ガ さ 面 研  
っ く り ヒ 「 、 し し を ネ ん 基 究  
た る ヒ | こ 、 て つ あ る 地 室  
の か。 を 二 つ、手 | O K。 な ん と か 間 に 合 っ っ け て、 、 海 野 が 左 右 の 色 が 違 う 作 業 室。 機 械 が あ ち こ ち に た  
お 疲 れ 様」

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

海野 ー 私 は た だ 、 プ ロ ト コ ル に 従 っ て プ ロ グ  
三 沢 ー く 自 分 の コ ー ヒ ー を 手 に 、 三 沢 が 近 づ い て  
海野 ー を 飲 ん で 、 間 に 合 っ た わ  
海野 ー コ ー ヒ ー が と ー  
海野 ー あ り が と ー  
海野 ー コ ー ヒ ー を 海 野 に 手 渡 す

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

ラムを書いただけ。宏志がインターフェー  
スユニットを作ってくれたお陰よ」  
山口「いや、僕は設計図を書いただけだよ。  
ここのスタッフが優秀だった、ってことで  
すよ（三沢の方を見る）」  
三沢「いやいや。二人ともなかなか優秀です  
よ。もう即戦力って言うてもいい位に。二  
人とも、卒業したら、うちにこない？」  
海野「（笑顔で）考えておきます」  
山口「……（苦笑い）」

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

三 沢 一 だ ー も 、 あ れ だ ね 。 奈 美 ち ゃ ん の キ ー 入  
力 の 早 さ は 神 業 だ ね 。 い く ら 物 理 的 に 手 を  
動 か さ な い で 、 仮 想 キ ー ボ ー ド で 入 力 を し  
て る と い っ て も 、 あ れ だ け の 早 さ は 真 似 出  
来 な い な ー  
山 海 野 一 そ ん な こ と な い で す よ ー  
口 一 い や い や 。 僕 は ち ゃ っ と あ れ は 苦 手 だ  
か ら 、 未 だ に 物 理 キ ー ボ ー ド で す け ど 、 奈  
美 の キ ー さ ば き を 見 る 度 、 凄 い な ー っ て い

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

海野「……（苦笑い）」

三沢「海野先生、何かコツでもあるんですか？」

海野「止めてくださいよ、先輩」

山口「僕も聞きたいな」

海野「そうですね……私、昔、ソロバン、やってたんですよ。最近あまり流行ってないけど」

三沢「へえー」

海野「で、ソロバン、って、物理的な玉を弾く、ってイメージ、あると思うんですが、

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

る す バ 海 山 海 山 上  
ん ° ン 野 口 っ 野 が 口 級  
で そ ー を ー ー た ー あ ー 者  
、 そ ー を ー ー た ー っ ー そ う に  
、 ン な イ メ 暗 ー ま 、 ー け い なる  
比 較 的 ー こ が 仮 想 キ ー ボ ー ド と 似 て い  
慣 れ や す か っ た か な 、 っ  
、 暗 算 だ っ た の ？ 知 ら な か  
、 僕 も 昔 、 少 し や っ て た 事  
、 これ 、 頭 の 中 で ソ ロ

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

三 沢 「なるほどね。ソロバンの暗算の要領か。  
て 思います」  
山 口 君が下手なわけだ」  
山 口 「ちよ、ちよつと。なんですか、それ」  
海 野 「そうか、そう言う訳だったんだ」  
山 口 「奈美まで。止めてくださいよ」  
海 野 、 山 口 、 三 沢 「はははは（笑う）」  
三 沢 「ま、それはともかく、これでソノミと  
通 信 で 直 接 コ ン タ ク ト が 取 れ る よ う に な る  
訳 だ 。 テ ス ト ま で ま だ 1 時 間 あ る か ら 、 ち

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

○

海野「そうですね」

利根川「スピーカーからの声」利根川だ。I

S S 移設プロジェクトのメンバーは、至急、

会議室まで集まってくれ。以上だ」

○

月面基地・会議室（昼）

月面基地の会議室。総勢30名位の人た

ちが会議に臨んでいる。メンバーは不安

そうにひそひそ話合っている。正面の

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

スクリーンには、何も映っていない。遅  
れて、筑波博も後ろのドアから入って来  
て、近くの席に座る。海野達も後ろの席  
に並んで座っている。  
利根川翼が、スクリーン前に立って、説  
明を始める。  
利根川「先ほど、本社から連絡が入った。(暫  
し躊躇して)緊急事態だ。本ISS移設プ  
ロジェクトは、計画を急遽変更する」  
途端に、会議室がざわめく

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

利根川「静かになる。聞いてくれ」

利根川「詳しい事は、本社の方から説明がある」

健太朗「あれ、このスタッフに指示する。正面スクリーンが点灯し、筑波健太郎ら数人が現れる」

で「す」

初めまして。私は東京天文台の筑波健太郎

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

健 太朗「先日、ある小惑星が発見されました。

や軌道などの情報が表示される

って、左上に移動し、その代わりに地球

スクリーン上で健太朗の映像が小さくな

健 太朗「私が今回の事情をご説明します」

筑波博「健太朗」

海野「健太朗さん？」

計算の結果、昨日、地球への直撃コースに

発見が遅れました。直径およそ100Mで、

太陽を背にするコースを通って来たため、

タイトル『彼方からの手紙』ーシナリオ

健 健  
想 5 は 太 亡 伏 太 入  
さ 0 、 朗 会 す せ 朗 会 っ  
れ 0 キ お 朗 ー 議 る せ 朗 ー 議 て  
ま キ 口 お ー 議 室 と ら 事 室 在  
す 口 圈 よ ー 室 内 い 情 が いる  
。 内 6 に 、 少 少 事 が 事  
た が 0 よ り し 情 情 が 確  
だ 壊 0 % と 落 ち 事 情 で 認  
し 滅 〇 も し 地 球 着 あり あ と 、 され  
、 的 な 被 害 衝突すれば、半 徑 率  
衝 突 予 想 地 点 は 、 衝 滅  
「 地球が滅

突時刻の関係で、30%の確率で、東京で  
す。直撃を免れても、海に落ちれば、津波  
でかなりの被害が出ると予想されます」  
海野「ちよつと、何これ」  
三沢「大変な事になった」  
利根川「（怒鳴る）静かにしろー」  
健太朗「ありがとうございます。地球は、人  
類は滅亡しませんが、被害は甚大です。我々

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

は、政府機関、国際機関等と緊急の会議を  
開き、対応を検討しました。もっと早く見  
つかって、時間の余裕があれば、まだ色々  
と打てる手もあったでしょう。しかし、残  
された時間はあと二週間。14日後には地  
球に最接近します。最悪の場合、衝突です。  
そこで見つかった、今のところ唯一の案は、  
今あなた達がやろうとしている、ISSス  
テーションを使う方法です。関係部署の許  
可は取ってあります。お願いします、ISS

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

ステーションを使わせて下さい（頭を下げ  
る）  
会議室内、ざわつく  
利根川が立ち上がり、場内を制して  
根川「計画はこうだ。まず、ISSステ  
ーションを移動して、接近しつつある小惑星  
に着陸させる。そして、ステーションを小  
惑星に固定後、月にある予備を含めた10  
機のハーキュリーV（ファイブ）エンジン  
で小惑星の軌道を変更する。計算によると、

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

	利	山	三	海					
彼	軌	入	は	根	口	沢	野	き	こ
方	道	出	当	川	「	「	「	る	れ
に	に	来	初	「	ん	助	よ	は	で
飛	入	な	の	た	、	か	か	ず	地
び	る	く	計	だ	ち	っ	っ	だ	球
去	た	な	画	し	よ	た	た	。た	へ
る	め	る	の	、	っ	「	「	だ	の
事	、	。ス	よ	こ	と			だ	衝
に	小	テ	う	れ	ま			し	突
な	惑	「	に	に	て			、	コ
る	星	シ	、	よ	？			」	ー
「	と	ョ	人	り	「				ス
	一	ン	工	、					か
	緒	は	惑	ス					ら
	に	、	星	テ					外
	、	、	軌	「					す
	宇	放	道	シ					事
	宙	物	に	ョ					が
	の	線	投	ン					で



タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

山  
口「本  
当なら  
ソノミ  
さんを  
降ろし  
て、ス  
テ  
ー  
ション  
だけ使  
いたい  
所だけ  
ど、時  
間もな  
いし、  
それに  
筑波先  
生によ  
ると、  
ソノミ  
さん  
の人工  
自我が  
生じた  
のは、  
たまた  
ま千体  
集まった  
為の、  
偶然な  
んだそ  
うだ。  
プロト  
タイプ  
だけと  
か、一  
部だけ  
降ろし  
たり、  
群  
体を分  
けたり  
したら  
、どう  
なるか  
：  
：  
も  
う  
ソノミ  
さん「下  
を向い  
て」折  
角、よ  
うやく  
ヒロシ



一同、博を見つめる

博 「妻を失い、子や孫もいる。もう十分だろ

う。十分責任は果たしたと思う」

海野 「先生」

博 「それに、ソノミには、このソノミには昔、

大変世話になった。僕がソノミを作ったの

だし、最後まで責任を取らないとな（笑顔）」

山口 「そうだな、それがいいかもしれない」

海野 「宏志、何言ってるの？」

博 「いいんだよ、いいんだ」

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

				海				○
ッ	て	く	は	野				
ト	宇	れ	、	（	に	ノ	I	I
で	宙	ま	自	N	ス	ミ	S	S
し	開	し	ら	）	テ	ロ	S	S
た	発	た	率	「	ー	ボ	ス	ス
か	に	°	先	筑	シ	ツ	テ	テ
ら	も	元	し	波	シ	ト	ー	ー
、	使	々	て	先	ヨ	が	シ	シ
作	わ	、	、	生	ン	、	ヨ	ヨ
業	れ	放	計	の	の	人	ン	ン
は	て	射	画	説	改	間	内	外
予	い	線	の	得	造	の	外	観
想	た	耐	実	に	作	作	で	（
以	ソ	性	現	納	業	業	、	宇
上	ノ	に	に	得	を	員	量	宙
に	ミ	優	協	し	し	達	産	空
は	型	れ	力	た	て	と	型	間
か	ロ	て	し	ソ	い	一	の	）
ど	ボ	い	て	ノ	る	緒	ソ	
				ミ				

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

山	海			テ	○		
口	野			研	ロ	が	り
ー	ー	休	月	究	ッ	過	ま
あ	あ	憩	面	所	プ	ぎ	し
あ	ん	し	基	ー	ー	ま	た
、	と	て	地		2	し	。そ
ソ	か	い	、		0	た	し
ノ	、	る	喫		5	ー	て、
ミ	間		茶		8		あ
型	に		ス		年		つ
ロ	合		ペ		8		と
ボ	い		ー		月		い
ツ	そ		ス		1		う
ト	う		。		5		間
の	ね		海		日		に
力	ー		野		、		1
が			、		月		0
大			山		面		日
き			口		基		
か			が		地		

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

山 海 山 海  
口 野 口 野  
「ま さ か 。 先 生 も 分 っ て い る と 思 っ た  
先生 の 意 識 デー タ を 入 れ た 、 身 代 わ り の ロ  
「 ま さ か 先生 、 本 当 に 行  
く と か 言 わ な い よ ね ー  
「 ま さ か 先生 、 本 当 に 行  
い と 、 ソ ノ ミ が 納 得 し な い と 思 っ て ね ー  
「 嘘 も 方 便 。 あ の 時 は 、 あ あ で も 言 わ な  
な り 何 を 言 い 出 す か と  
「 ー で も 、 あ の 時 は び っ くり し た よ 。 い き



タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

三 海 博 大 三  
沢 野 ー て 曾 沢  
ー ー 変 海 れ ー 下 根 ー 三  
あ どう に 野 ば 大 さい ー 所 沢  
あ う 気 野 ば 大 ー い ー 長 を 沢  
、 し 付 山 ば 大 ー ー 波 を 大  
奈 た いて 口 ー ー 先生 先生 曾  
美 さんで 駆け ー ロ ビ ー 本 本 根  
ち すか？ ー ー ー 当 当 ー と  
ゃ ー ー ー 入 入 ー 入 入  
ん 。 ー ー ー っ っ っ っ っ  
奈 ー ー ー っ っ っ っ っ  
美 ー ー ー っ っ っ っ っ  
ち ー ー ー っ っ っ っ っ  
ゃ ー ー ー っ っ っ っ っ  
ん も ー ー ー っ っ っ っ っ  
止 ー ー ー っ っ っ っ っ  
め ー ー ー っ っ っ っ っ

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

利根川「所長！」  
大曾根「分かります。許可しましょう」  
利根川「深々と頭を下げる博  
てのわがままなんだ。僕をソノミと行かせ  
博「聞いてくれ。これはわがままだ。僕の最  
山口「先生？まさか」  
て、先生を」

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

大 三 大  
曾 沢 曾  
根 一 根  
「 所 一  
今 長 ？  
回 の ？  
の ミ  
ミ ッ  
ッ シ  
シ ョ  
ン の  
要 は  
、 小  
惑 星  
で

利 全 お 大 三 大  
根 全 お 曾 沢 大  
川 一 一 一 一 一  
「 行 び 一 一 一  
は う び 現 利 所 一  
い ん 地 根 長 ？  
、 だ の の 川 ？  
そ う た 作 君 、  
で す 。 よ 業 は 確  
。 ね 一 は か 、  
そ の ま ま 小 惑  
ま 旅 立 っ 星 へ  
つ っ の 着  
て っ 陸  
て っ 陸



タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

大曾根「利根川君、所長命令だ。直ちに筑波先生が、ステーションで作業出来るように、そして暫く生活出来るように、準備をしたまえ」

博「大曾根君、ありがとう」

大曾根「いえ、筑波先生、よろしくお願いします」

大曾根、深々と頭を下げる。それに同調して、他の一同も加わる

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

○

○

る	い	で	I	同	型	行	I	I
。	る	、	S	宇	ロ	く	S	S
	海	窓	S	宙	ボ	°	S	S
	野	か	ス	船	ツ	ス	ス	ス
	、	ら	テ	内	ト	テ	テ	テ
	山	遠	丨		が	丨	丨	丨
	口	ざ	シ		、	シ	シ	シ
	ら	か	ョ		数	ョ	ョ	ョ
	°	る	ン		体	ン	ン	ン
	宇	ス	か		、	の	か	近
	宙	テ	ら		作	外	ら	く
	服	丨	離		業	壁	宇	(
	を	シ	れ		を	で	宙	宇
	着	ョ	る		続	は	船	宙
	用	ン	宇		け	、	が	空
	し	を	宙		て	ソ	離	間
	て	見	船		い	ノ	れ	)
	い	て	内		る	ミ	て	
					°			

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

海野「これで、よかったのよね？」

山口「ああ、多分、な」

山口、ISSに向かつて敬礼する。それ

に気付き、周りの一同も同調する。

○ 月面基地・MC（夜）

月面基地のミツシヨンコントロール

ム。多くのスタッフの機材のある席に着

いて、作業をしている。

スタッフ1「間もなく、小惑星に着陸します」

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

山	海				ス		筑	
口	野		確	ち	タ	小	波	
「	「	後	認	ら	ッ	惑	「	映
あ	こ	ろ	し	月	フ	星	こ	る
あ	こ	で	ま	面	2	に	ち	く
。	ま	様	し	ミ	「	着	ら	利
問	で	子	た	ッ	I	陸	、	根
題	は	を	「	シ	S	し	I	川
は	、	見		ヨ	S	た	S	。
こ	う	て		ン	ス	「	S	ス
れ	ま	い		コ	テ		ス	ク
か	く	る		ン	「		テ	リ
ら	行	、		ト	シ		「	「
だ	つ	海		ロ	ヨ		シ	に
「	た	野		「	ン		ヨ	筑
	わ	、		ル	、		ン	波
	ね	山		。	了		、	の
	「	口		着	解		筑	映
		。		陸	。		波	像
				を	こ		。	が

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

			○	ソ	筑	ス
				ノ	波	タ
型	シ	小	小	ミ	筑	ツ
ロ	ョ	惑	惑	「	波	フ
ボ	ン	星	星	了	の	2
ツ	が	に	外	解	後	「
ト	接	ほ	観	「	方	筑
が	岸	ぼ	(		に	波
ス	し	同	宇		ソ	先
テ	て	じ	宙		ノ	生
ー	い	大	空		ミ	、
シ	る	き	間		が	ス
ョ	。十	さの	)		い	テ
ン	数	I			る	ー
か	体	S				シ
ら	の	S				ョ
飛	ソ	ス				ン
び	ノ	ステ				の
出	ミ	ー				固
し						定
、						



タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

筑波 「こちら、ISSステーション、筑波。  
小惑星への固定作業を完了した」  
スタッフ2 「ISSステーション、了解。こ  
ちら月面ミッションコントロール。作業完  
了を確認しました」  
後方に、海野、山口が控える。若干服装  
が変わっている  
海野 「いいよね」  
山口 「ああ」  
利根川、同じ服装で少しくたびれている。

タイトル『彼方からの手紙』 - シナリオ

開始  
「  
スタートアップ1  
「了解、エンジン始動、軌道変更  
ス  
変更改開始！  
「  
利  
根川「ステーションのエンジン始動、軌道  
決して  
利  
根川「利根川、暫し天井を見る。そして、意を  
利  
根川「利根川君、そろそろ時間かな？  
大  
曾根「入って来る。そこに、大曾根が  
暫し考え込んでいる。そこに、大曾根が

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

筑波「こちら ISS ステーション。了解した。  
軌道変更を開始する」  
面ミツシヨンコントロール。エンジンを始  
動し、軌道変更を開始して下さい」  
スタッフ2「ISSステーション、こちら月  
小惑星外観（宇宙空間）  
小惑星に固定した ISS ステーション。  
同方向に向いた10の巨大ロケットエン  
ジンノズルが一斉に火を吹く。

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

ス		ス		ス	○
タ	0	タ	1	し	タ
ツ	皆	ツ	一	た	ツ
フ	、	フ	同	。燃	フ
1	無	1	、	焼	1
「	言	「	祈	停	「
小	で	5	る	止	小
惑	結	0	よ	ま	惑
星	果	・	う	で	星
の	を	4	に	、	の
軌	待	0	見	あ	移
道	つ	・	守	と	動
変		3	っ	1	開
更		0	て	2	始
を		・	い	0	が
確		2	る	・	確
認		0		1	認
し		・		1	さ
ま		1		1	れ
し		0		0	ま
		・		・	

タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

筑					海	三	山	
波					野	沢	口	た
ー	ー	無	野	三	ー	ー	ー	ー
こ	ン	言	。拍	沢	ー	ー	ー	同
ち	を	で	子	を	や	や	や	、
ら	凝	額	抜	躲	っ	っ	っ	喜
I	視	く	け	し	た	た	た	び
S	す	大	し	て	、	ね	!	合
S	る	曾	た	、	や	、	ー	う
ス	利	根	三	山	っ	助		
テ	根	。腕	沢	口	た	か		
ー	川	を		と	よ	っ		
シ	。	組		抱	ー	た		
ョ		ん		き		よ		
ン		で		合		。	美	
。		、		っ			奈	
ハ		ス		て			ち	
ー		ク		喜			ゃ	
キ		リ		ぶ			ん	
ユ				海			ー	

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

筑波「こちららISSステーション。了解した。  
ミッシェルの成功を確認。ありがとう」  
利根川「（叫ぶ）筑波先生！」  
です」  
変更を確認しました。成功です、予定通り  
面ミッシェルコントロール。惑星の軌道  
スタッフ2「ISSステーション、こちら月  
静まる場内  
うか」  
リーエンジンの燃焼を終了した。軌道はど



タイトル『彼方からの手紙』—シナリオ

山口 海 山口 海 山口 海 山口 海 山口 海

「あ あ」 「幸せなんだよね」 「あ あ」 「きつと、うまくやっってるよね」 「どうしてるかな」 「今頃、どうしてるかな？」 「あ あ」 「う、小惑星、見えなくなっちゃったね」 「（指差しながら）あっちの方向かな？も

暫し夜空を見つめる。やがて、山口、海

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

○ 同 ISS ステーション内へ幻想風景

宇宙空間を音もなく進んでゆく

ISSステーションの接岸した小惑星、

○ 小惑星遠景（宇宙空間）

海野 「（笑顔で）うん」

現実に帰ろう」

山口 「夏休みも終わりだ……さあ、僕たちの野を見つめて、

野原に駆け出してゆく……。

わたる。若い姿の二人は、手に手を取って、

わってきて、一面に花の咲いた野原に変

ミの17歳の姿になる。周りの背景が変

ミの顔も人間らしくなり、筑波博、ソノ

やがて、博の顔は若くなっ、ソノ

る。その顔は笑顔で、幸せそうである。

隣にはプロトタイプソノミが座っている。

椅子に筑波博（72）が座っている。その

ステーション内の居室。背もたれのある

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

○

ア パー ト 室 内 ( 昼 )  
山 口 宏 志 の ア パー ト 。 無 人 の 部 屋 に パソ  
コ ン が 点 いて いる 。 突 然 メー ル の 着 信 音  
が 鳴 り 、 や が て 自 動 的 に メー ル が 開 く 。  
そ れ に は ( 今 あ る よ う な 二 次 元 の ) 写 真  
が 添 付 さ れ て いた 。 そ こ に は 、 筑 波 博 と  
ソ ノ ミ の 野 原 で の ハ イ キ ン グ の 風 景 が 写  
っ て いた 。 そ れ は 、 高 校 生 の 若 い 姿 で 、  
幸 せ そ う に 笑 顔 な ツー シ ョ ッ ト だ っ た 。

タイトル『彼方からの手紙』－シナリオ

○

お

わ

り